正木美術館所蔵

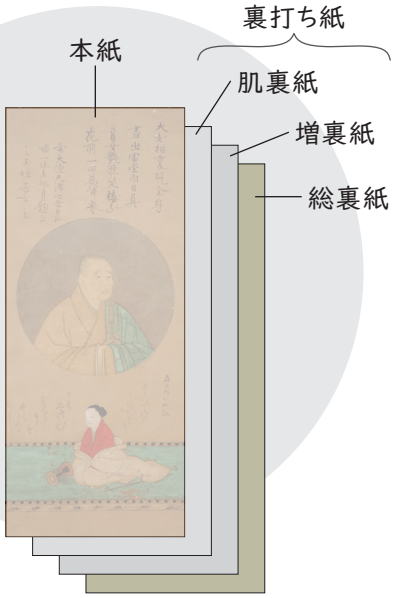
「一休宗純と森女図」保存修復事業レポート③

2021年10月1日に修復事業の開始をお知らせした「一休宗純と森女図」について、進捗状況をご報告します。

①裏面の古い裏打ち紙を全て取り除き、本紙だけの状態に解体した後、本紙に新たな肌裏紙を重ねる「肌裏打ち」を行いました。
これは本紙に、新しい肌裏紙が一枚だけ重ねられた状態です。ごく薄い色調に染色した美濃紙を用いています。保存修復事業レポート①の修理前の写真と比べると、劣化した古い裏打ち紙が除去されたことで本紙の折れなどが解消され、画面が格段に安定してきたのが分かります。

1

ここで、掛け軸の構造に注目してみましょう。
掛け軸は、絵が描かれている本紙の裏に、裏打ち紙を幾重にも重ねて補強しています。
本紙のすぐ裏に「肌裏紙」、その後ろに「増裏紙」を重ねて、一番最後に、掛け軸をかけた時に壁と接する「総裏紙」がつきます。



今後の工程で重ねていく増裏紙も、ごく薄い茶色に染色したものを用います。
掛け軸を表面から見た時の印象はこの増裏紙の色調が影響するため、新たにする紙の選定やその色調を慎重に検討しました。

②掛け軸の表装裂も、解体して修理を進めています。
これは、本紙の上下についていた「一文字」と呼ばれる部分です。
紫地印金と呼ばれる最高級の古裂が用いられていますが、部分的に欠失するなど劣化が進んでいました。

2

▲修理前の一文字。

▲裏返し、補強している肌裏の裂を除去した状態。
ここから新たな裂で裏打ちをしていきます。

本作品は2021年10月から三菱財団の文化財保存修復事業助成を受けて、本格的な修理に着手しています。
完成は2023年9月を予定しておりますので、続報をお待ちください。

（2022年12月15日現在）